Curriculum Center for Teachers
Tokyo Gakugei Univ.

Creative Curricula & Teaching
Newsletter

国立大学法人東京学芸大学
教員養成カリキュラム開発研究センターニュースレター
第２１号　２０１８年２月　発行

# 学びの原点に立ち返る―「理科」と「社会科」の間―
## 2017年度公開シンポジウム報告

2017年12月17日（日）、教員養成カリキュラム開発研究センター主催の公開シンポジウム「学びの原点に立ち返る―「理科」と「社会科」の間―」が東京学芸大学で開催された。社会科と理科は、社会科学と自然科学という異なる学問体系を背景とし、相補的なものとして位置づけられることが多いが、私たちが生きているこの世界のありようを発見し、理解し、それに主体的にかかわっていこうとする資質を育てるという目的は共通している。これらの教科を通しての学びは、子どもが生きる上でどのような力と糧になるのか。教員養成の現場から、宇宙物理学と理科教育を専門とする小林晋平氏（東京学芸大学自然科学系物理科学分野准教授）、元日本社会科教育学会長で歴史教育と韓国教育を専門とする坂井俊樹氏（開智国際大学教育学部長、東京学芸大学名誉教授）、環境教育と教育学を専門とする原子栄一郎氏（東京学芸大学環境教育研究センター長）をお迎えし、彼らが教科学習の目的をどう語るかを聴き合い、分野の垣根を超えて議論した。

小林氏は、専門の物理学を私たちの生活とダイナミックに関連させながら、本来の学びとはいかに自分が自由かを知るものであると語った。教師を目指している学生に対しては、「子どもたちに、自分がいかにたくさん選択肢を持っていて、世界は広くて、自分は自由なのかを見せてあげられる教師になって欲しい。そのためには先生自身が様々なものから「自由」でなければならない。そのときにこそ学問が必要になる。」というメッセージが送られた。坂井氏は、社会事象における「事実」とは何か、をテーマにした。例えば歴史教育で考えると、私たちは安易に「絶対的」「ゆるぎない事実」を、史料論と重ね合わせて歴史的「事実」「当り前」と見なしてきたのではないか。時にはそれが世間の常識となって語られる場合もあろう。しかし、歴史を含む社会的「事実」とは、私たちの多くの人々の「共同性」「共通意識」のもとで決められ、相対的なものであるのではないか、その点を自覚しないと、その時々の政治や社会経済的状況によってゆがめられる危険性があると語った。原子氏は、環境教育の地平から、不知火海の漁師であり水俣病患者の緒方正人の生の軌跡のドラマと願いから、「人間として生きる」学びについて考察を掘り下げていった。一人の人間として、肩書きや社会的役割といったいわゆる仮面を剥ぎとって生身の人間として、私の本当の願いは何か、私は本当のところ何を願っている人間かということを知ることが一番大事だと語った。

教育という課題を共有している人間同士が、それぞれの専門に根差しつつ領域を超えて語り合うとき、どのような化学反応が生じるのかを期待して企画したが、3人のお話に共通していたのは、人間、自己、自由といったことと学ぶことの関係だったように思う。フロアを交えた活発な質疑応答を通して一人一人が学びの原点に立ち返り、参加者アンケートには、「自分が意識できていない無自覚の決めつけをひっくり返されたような、心が入れ替わるようなシンポジウムでした」という言葉もみられた。3名のシンポジストと、研究者、教師、学生、市民の皆さんをはじめとした50名を超える参加者に感謝したい。シンポジウム記録集は2018年3月に刊行予定である。

（金子　真理子）

# 新客員准教授のご紹介

教員養成カリキュラム開発研究センターは、本年3月から8月まで、香港教育大学よりジェ・パク（朴 宰亨）先生を客員准教授としてお招きします。来日を前に、ご自身の来歴と研究テーマについてご寄稿いただきました。

このたび東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター客員准教授として研究の機会を得ることができ、大変名誉に感じています。今回の件については、比較教育学分野の国際学会などでご一緒することのある岩田康之教授にご紹介いただきました。後に詳述しますが、私は学問研究の世界に少し遅れて入ってまいりました。任期中は、自分自身の研究を進めると同時に、日本の教育についてセンターの皆様から学ぶことを目標にするつもりです。

私は「サード・カルチャー・パーソン」です。というのも、10代まで韓国で過ごし、その後スペイン語圏のペルーに移住し、そこで中等教育と高等教育を受けたからです。ペルー政府と「毛沢東主義」のゲリラ集団のあいだでテロ戦争が勃発したのは、私が医学部に通う2年生のときのことでした。戦闘が続く中、小児外科専門の医師になり、小児科病院に勤務しました。その間、戦闘に加わった若者たちが痛みや流血で苦しむ姿を間近で見てきました。彼らのための教育は権利であり、崇高な理想ですが、暴力、停電、人的被害があるなかで、これらのことは紙の上の理論でしかないと当時の私は考えていました。イデオロギー対立と、言語と通貨としての暴力の結果に苦しむ罪のない子どもたちを診ながら人文社会科学に情熱を抱くようになった理由は、おそらく以上のような出来事にあります。戦争状態ですべてが危険だったペルーは、私にとって第二の文化でした。私の医学博士号は、書物に基づくというよりむしろ経験に基づいたものだったと思います。東京学芸大学での客員准教授としての滞在は、さらに自己を振り返り、自分の経験を先生方や学生のみなさんと共有する機会になるでしょう。

私は実際的な慈善事業と社会奉仕に常に関心を抱いてきました。これは私の生来の性格に由来するというより、人を殺したり、若年兵を訓練する人たちが私の同世代のなかに存在するといった現実への反応によるものと考えられます。EUの慈善団体に見いだされた私は、第三の文化であるポストコロニアルかつネオリベラルな香港にやって来ました。

当地の教育関係の慈善事業に参加していたとき、私はもう一つの悲劇を知ることになります。それは、試験とスキル志向の教育に苦しめられる子どもたちの姿でした。これがきっかけとなり、教育行政・経営学の修士課程に入学することになりました。そして香港大学で教育学の博士号を取得します。博士論文のテーマは「承認のリーダーシップ」で、その間、現在は豪州ニューサウスウェールズ大学で教鞭をとるコリン・エヴァーズ教授の指導を受けました。博士課程修了後の2009年には、香港大学のポスドク研究員になりました。これが学問の世界での初めてのフルタイムの仕事でしたが、私はこれをキャリアとしてではなく、社会、とりわけ若者に奉仕する別の方法として捉えていました。そのときまでに、私は権力のダイナミクスに、より批判的になっていました。権力は、幼児教育におけるように捉えにくい場合もあれば、様々なかたちの教育や社会制度におけるように象徴的暴力として捉えられる場合もあります。特に後者には、知識とマンパワーを生産することを「責務」とする国家機構としての、ネオリベラル的な性格を帯びた現代の高等教育も含まれます。

現在の所属大学では助理教授の職にあり、同時に生涯学習研究開発センターの国際教育研究グループ長をしています。主たる専門領域は教育社会学、クロス・カルチュラル・スタディーズ、比較教育学です。これまで論文が掲載された査読付き国際ジャーナルには、Comparative Education Review、Educational Philosophy and Theory、International Studies in Sociology of Education、Comparative Education、Journal of Multilingual and Multicultural Development、International Journal of Comparative Education and Developmentがあります。

その他の学術関連の活動としましては、香港比較教育学会（香港最大の教育学系学会）の前会長であり、The International Journal of Comparative Education and Development（英国Emerald社刊）の創刊時には編集委員長を務めました。また、書籍シリーズのEducational Leadership Theory（Springer社刊）の編集委員、The Routledge Encyclopedia of Educational Philosophy and Theoryの委員を務め、後者の事典では「平和教育」セクションの編集を担当しています。

私が従事した他の大規模な研究として、教育工学の社会学的次元の研究を挙げることができます。香港政府による「デジタル・ディバイド」に関する公共政策研究の共同研究に2期（1期2年）参加しました。このプロジェクトでは、「文化資本」と子育ておよび家族のあいだの相関関係を捉えるフレームワークを提案しました。この成果は、New Media & Society、Educational Technology Research and Development、Asia-Pacific Education Researcher、Ethics & Behaviorといった定評のある査読付きジャーナルに掲載されています。

このたびの教員養成カリキュラム開発研究センターでの滞在が、開かれた経験と知識の交流の機会になることを願っています。そして教師教育の領域での見識を深めたいと思っています。東京学芸大学の先生方と学生のみなさんからインスピレーションと刺激を得ることを楽しみにしています。

ジェ・パク（香港教育大学助理教授）
上杉　嘉見　訳

# “教師たちの物語を支えることの大切さ”
## ジーン・クランディニン教授の講演会から

高井良　健一（東京経済大学）

2017年10月19日（木）、東京学芸大学20周年記念飯島同窓会館にて、カナダ・アルバータ大学教授、ジーン・クランディニン氏による講演会が開催された。国際的なナラティブ的探究（narrative　inquiry）の旗手として知られるクランディニン教授の招聘は、東洋大学の桂直美教授を研究代表者とし、筆者も研究分担者を務める科研によって実現したものである。講演会では「教師の“支えとする物語”をささえる教師教育へ」という題目で、教師の語りを対象としたカナダの二つの調査研究に基づいて、一人ひとりの新任教師の物語を支えることの大切さが以下のように論じられた。

今、世界では、教師の仕事がストレスに満ちたものとなっており、カナダにおいても、若い教師たちの早期離職が問題となっている。教育行政は、教師を引き留める（retain）ための政策をあれこれと考案しているものの、教師を支える（sustain）ものにはなっていない。教職２～３年目の新任教師ならびに５年未満で教職を離れた人々の語りの分析を通して、専門家としての人生と一人の人間として人生が葛藤状態になったときに、教師は大きなストレスを抱え、職を離れることが明らかになった。教職は、教師の自己と深くかかわった職業であり、自己の物語が職業生活に押しつぶされるのではなく、これによって深められることが、教師の仕事の質を高める上でも重要な鍵を握っている。そのためには、教師教育者が、養成段階から未来の教師たちに自己を語り、自己をより深く理解する機会を提供しなくてはならない。その上で、学生（教師）たちの支えとなる物語を探究し、支えとなる知識を創る仕事として、教師教育を再構築することが喫緊の課題である。

今回の講演会には、全国各地から40名近い参加者があった。講演会は、クランディニン教授の情熱的で説得的な語りと、都留文科大学山辺恵理子講師の完璧な通訳と、同大学田中昌弥教授の的確なコメントにより、学び多い時間となった。第二部の質疑応答では、より具体的なナラティブ的探究の方法論についてうかがうことができた。講演会の準備にご尽力いただいた金子真理子教授をはじめとする学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センターの皆さまに、深く感謝を申し上げたい。

### 教師教育の術語㉑
### 「メンター」

ギリシャ神話に登場するメントール（王子を導いた先輩）に由来し、転じて経験の乏しい者に対しての「助言者」「伴走者」「支援者」等の含意を帯びる。日本の教師教育の現場においては、ある程度経験を積んだ教師たちに対して初任者の職能成長を促すことを期待する文脈で「メンター」や「メンターシップ」等の語が用いられることが多い。

教育課題が多様化し、その対処が個々の学校に委ねられる昨今の状況では、いわゆる一斉研修よりは、個々の学校の具体的な教育課題を共有する同僚によるサポートの方が、若手教師には有効に作用するケースが多い。また、若手教師をサポートすることを通じて、中堅・ベテラン教師の職能成長につながる効果もある。そうした背景から、横浜市などにおいては、若手教師と中堅教師をメンターチームとして組織して研修のサポートを行う取り組みもみられるようになった。メンターとメンティーの関係づくりや双方の業務負担等、少なからぬ課題はあるが、日本の教員研修においては期待を集めつつある。（岩田　康之）

### 教員養成カリキュラム開発研究センターの主な最新刊行物

〈冊子体および電子データによる刊行物〉

- ●『東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター第17回シンポジウム記録集 アクティブ・ラーニングと教師の力量：小学校理科を主題に』（2017年2月）
- ●『教員養成課程におけるグローバル次元の研究―IB教員養成の国際比較―（報告書）』（2016年12月）

〈冊子体のみ〉

- ●『東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター研究年報』第16巻（2017年3月）

〈電子データのみ〉

- ●講演会「台湾社会と教師――職業イメージと期待をめぐって」記録集（2017年9月）

＊ 刊行物一覧は本センターウェブサイトに掲載されています。送付をご希望の方は、本センター連絡先（4頁奥付参照）までお問い合わせください。

# 教師が育つ現場　第21回

## ドレスデン工科大学
## 教師教育・教育学研究センター（ドイツ）

ロルフ・プダーバッハ
（ドレスデン工科大学教師教育・教育学研究センター
プロジェクト・コーディネーター）

ドイツにはいま教員養成課程を持つ大学が約80校あります。ドレスデン工科大学もその1つで、教員養成課程の運営には全学の教員が関わっています。現在、登録している学生は約3500名。彼らは普通教育学校（初等・中等学校とギムナジウム）と職業学校の教員志望者で、普通教育の24教科と職業教育の9教科から専攻教科を選ぶことができます。教員養成課程は、主として学内の6ファカルティが中心となって運営していますが、間接的には14ファカルティのほぼすべてが関わっています。当センターは、これらのファカルティの教育活動をコーディネートするために、2005年に創設されました。それ以来、教員養成課程の管理運営、質保証、カリキュラムと学修プログラム開発、教員養成の高度化、教育研究その他において重要な役割を担っています。

当センターは、教員養成と関係が深いファカルティと外部の関係者が参加する運営協議会から様々なアドバイスを受けています。またいくつかの分野別委員会が設置され、それらが学内の関係者と、州立第二段階教員養成（大学教員養成課程修了後の試補段階――訳者注）機関および教育行政当局の代表者との緊密な交流と協力のための枠組みを提供しています。委員会には学生の代表も参加しています。

当センターのなかで極めて重要な部門は、教員養成課程の学務係です。ここで学生は、自らの学修（試験、カウンセリング、教育実習など）の支援を受けることができます。

当センターは学際的な機関であり、教員養成分野の様々な研究開発プロジェクトをコーディネートしています。それらは主として、教員養成課程とその研究の文脈で生じている課題を扱うものです。具体的には、学生の科目選択状況、学習態度、課程の修了、学習を通したスキル形成、教員の中途入職、などの研究テーマがあります。

以上のような数多い業務のほかに、当センターは「シナジェティック教員養成」という共同プロジェクトにも取り組んでいます。これはQualitätsoffensive Lehrerbildung（質重視の教員養成）という全国規模のプログラムの一環で、連邦教育学術省の助成を受けています。教員養成に関わるすべてのファカルティで16のサブプロジェクトが進行中です。プロジェクト全体の運営は当センターが行っています。

サブプロジェクトは、主に以下の3つの課題に分けることができます。

第1のフォーカスは、大学における教員養成の組織面での発展に置かれています。たとえば、教育学と教科教育学の若手研究者のための大学院生フォーラムを設置し、また学内すべての教員志望学生のための学務業務を一元化しました。

さらにこのプロジェクトは、教員養成に関わる多くの人々のコミュニケーション、ネットワーキング、コラボレーションを強化する機関を創設することも目的としています。

第2に、教員養成課程の持続可能な質向上の実現です。大学教員は、学校での授業場面を録画した映像の活用といった新しい教育方法を開発しています。また、インクルーシブ教育や複式教育といった今日的課題を教員養成カリキュラムに取り入れる試みも行っています。

最後に、地域におけるネットワークの構築です。地元ザクセン州の農村地域の人口動向は危機的であり、本学と学校、地方自治体、文化機関などとの緊密な連携により、地域の教育制度をうまく機能させることが求められています。　（上杉　嘉見　訳）

### 編集後記

今年度当センターが手がけた事業には、地理的・学術的な境界を超えようとするものが多かったように思います。来年度もこうした試みは継続していく予定で、間もなく来日されるパク先生の講演会も行います。開催情報はウェブサイトを通じてお知らせいたします。

（上杉　嘉見）

カリキュラムセンタースタッフ

| | |
|---|---|
| センター長 | 真山 茂樹（教授、植物系統学） |
| 第１部門 | 金子 真理子（教授、教育社会学） |
| 第２部門 | 岩田 康之（教授、教員養成史） |
| | 上杉 嘉見（准教授、メディア教育学） |
| 第３部門 | 前原 健二（教授、教育行政学） |

編集・発行
東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター
編集協力
東京学芸大学／美術・書道講座／青山司研究室／青山司／大浦恵実

184-8501　東京都小金井市貫井北町４－１－１
東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター
Tel: 042-329-7776 Fax: 042-329-7786
E-mail: currict@u-gakugei.ac.jp
Web: http://www.u-gakugei.ac.jp/~currict/index.html